

鹿児島市におけるパブリックアートの認知度

～景観演出によるまちづくりの効果と評価に関する研究 その1～

正会員○関屋 修¹⁾
同 梶井銀二郎²⁾
同 板井康浩²⁾
同 友清貴和¹⁾
同 山下 剛²⁾

1. 研究の背景・目的

近年、都市景観を積極的に演出していこうとする動きが高まり、「パブリックアート」(以下P.A.)と呼ばれるものの街角や公園への設置が、まちづくりの手法の1つとして盛んに取入れられている。しかし、これらの演出は計画者や作者の思惟を中心として行われており、その効果の検証や評価はあまりなされていない。“個性のない彫刻のあるまちづくり事業の乱造が生れている”^{注1)} 今日、以上のようなP.A.の設置が、まちづくりや景観そのもの、または人々の心理にどのような影響を及しているのかを探り、今後のまちづくりの手法に対する知見を得ることが重要になっている。

そこで、その足がかりとして、本研究では鹿児島市内に設置されているP.A.が人々にどれ程認知され、どのような評価を得ているのかを明らかにすることを目的とする。

2. パブリックアート

パブリックアートとは1960年代のアメリカで生れた新しい言葉で、まだその定義は定っていないが、一言でいえば“街角や広場などの公共空間に置かれた、芸術的な価値のある作品”^{注2)} のことである。つまり、ブロンズや石の彫刻・街具などから公園や橋、芸術的要素

が多く見られる建築物そのものまで、さらには映像や光・音なども含まれるといえる。

しかし今回の研究では、積極的に景観を演出しようとしているもの・具体的な物体であるものに限定し、鹿児島市のP.A.やモニュメントに関して作者、設置者、事業等を調査し、最終的に設置年度・設置事業・設置場所の3つを選定基準の柱として21の対象物を選定した。【表-1】また、この設置年度・設置事業・設置場所をP.A.の属性として、分析でP.A.をグルーピングする分類軸とした。【表-2】

3. 研究の方法

選定したP.A.に対するアンケート調査を行った。P.A.の写真を見せ、質問には全て選択方式で回答してもらった。質問内容は以下の通りである。P.A.の設置してある場所を尋ねるためには、あらかじめ設置場所に番号をふった略地図を用いた。

【表-2】属性の種類

属性の種類	
P.A.の属性	設置年度・設置事業
被験者の属性	性別・年齢・居住年数・居住地域・職業

【表-1】パブリックアートの設置状況

グループ	名称	設置年代	設置事業	設置場所	設置場所周辺環境
G1	島津斉彬公之像	大正 6年	-	照国神社境内	施設に隣接
	西郷隆盛像	-	-	国道10号線沿い	大通りに面する
	刑務所門跡	-	-	鹿児島アリーナ入口	施設の正面入口に建つ
	戦災復興20周年記念塔	昭和40年	-	甲突川左岸緑地	周りに樹木が茂る
G2	若き薩摩の群像	昭和57年	50万都市達成記念事業	西鹿児島駅前広場	大通りに面する 障害物はない
	あしたの詩	昭和57年	モニュメント建設事業	谷山支所	施設の入口に建つ 道路側には植木がある
	朝の調	昭和58年	モニュメント建設事業	文化公園(市民文化ホール)	広場の中央に建つ 障害物はない
	雄気	昭和58年	モニュメント建設事業	文化公園(市民文化ホール)	広場の端に建つ 背後に樹木が茂る
G3	人魚	昭和59年	モニュメント建設事業	天文館公園	繁華街の公園の端 池の中央に建ち周りに樹木が茂る
	母と子の群像	昭和59年	高見橋の架けかえにあたって	高見橋	市電の走る大通りの橋の欄干
	こだま	昭和61年	彫刻のあるまちづくり事業	平田橋	橋の中央のアルコーブに建つ
	帽子の像	昭和63年	彫刻のあるまちづくり事業	甲突川左岸緑地	周りに樹木が茂る
G4	カルテット	平成 3年	彫刻のあるまちづくり事業	甲突川右岸緑地	大通りの近くに建つ 周りから見やすい
	春のよこび	平成 5年	彫刻のあるまちづくり事業	甲突川左岸緑地	周りに樹木が茂る
	ししおどし	平成 2年	まちかど整備事業	天文館(アーケード内)	アーケード内 周りに自転車などが並ぶ
	天空をめぐる星	平成 5年	タウンアメニティ事業	天文館(林田ホテル前)	アーケード 待ち合せに使われる場所
G5	馬と子ども	平成 4年	タウンアメニティ事業	大明ヶ丘交差点	郊外の住宅地の交差点
	星空と彫刻と滝のオアシ	平成 4年	-	天文館(銀行前)	アーケード 待ち合せに使われる場所
	悠雄	平成 4年	ロマンチックオブジェ事業	みなと大通り	大通りに面する 公園のランドマーク
G5	ま四角三つ	平成 6年	ロマンチックオブジェ事業	中央公園	繁華街の公園のランドマーク 大通り側に植木がある
	コーリング2	平成 7年	鹿児島県	北埠頭入口(道路沿い)	港への入口交差点 周りから見やすい

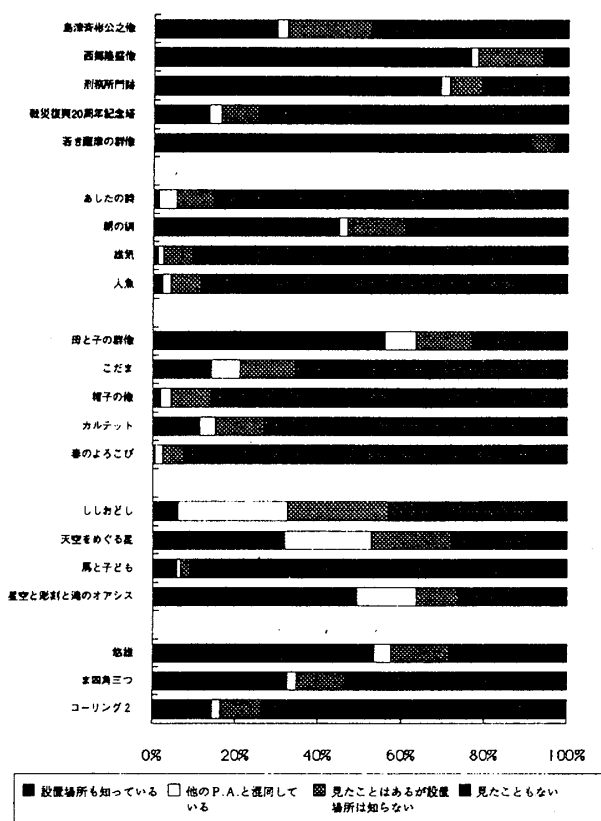
1) 鹿児島大学助教授・工博 2) 同大学院生

どのP.A.がどのような理由でどれ程認知されているのかを把握するために、(1) アンケートの写真の中で知っているP.A.はどれか、またその設置場所はどこか(2) どのような理由でそのP.A.を知っているのか、を質問した。また、人々のP.A.に対する評価をおおまかに把握するために、(3) 各P.A.の存在が好ましいか否か、(4) 各P.A.に対しどのような印象を持っているかを質問した。被験者は、鹿児島市近郊に住んでいる人(学生・会社員・主婦など)を対象とした。結果、865の回答が得られた。被験者に対しては、性別・年齢・職業・居住年数・居住地域を属性として、分析で被験者をグルーピングする分類軸とした。【表-2】

以上で得られたデータをP.A.の属性と被験者の属性または質問項目を基にクロス集計して分析し、鹿児島市のP.A.の認知度にどのような要因が関係しているのかを把握する。

本稿では、(1) の質問によって得られたデータを用いた認知度に関する分析結果を中心にまとめた。

※ 認知度 = (そのP.A.の設置場所まで知っている人の数 / 質問に回答した人の数)



【図-1】パブリックアートの認知度

4. パブリックアートの属性と認知度

P.A.を設置年度・設置事業を軸に5つのグループに分類し、そのグループごとに特徴をみる。【表-1】
【図-1】

21個のP.A.のうち「コーリング2」【図-2】だけが鹿児島県の事業によって設置されている。その他は全て市によって設置されている。

◆ [G1] (「島津斉彬公之像」・「西郷隆盛像」・「刑務所跡門」
・「戦災復興20周年記念塔」・「若き薩摩の群像」)

全体的に認知度がかなり高い値を示している。他のグループと比べてもその値の高さは歴然としている。中でも、「西郷隆盛像」・「刑務所跡門」・「若き薩摩の群像」【図-3】【図-4】【図-5】の認知度の高さが目立つ。この値の高さは全てのP.A.の中でも突出している。「西郷隆盛像」は、西郷隆盛が非常に有名な偉人であることが大きく影響していると考えられる。「刑務所跡門」は、その保存方法のことで数年前に話題となったことと、鹿児島アリーナという利用者の多い施設の正面入口に設置されていることが影響していると考えられる。「若き薩摩の群像」は、鹿児島市の交通の中心である鹿児島西駅の駅前広場に設置されていることに加え、それ自体が大きく目立つことが影響していると考えられる。

◆ [G2] (「あしたの詩」・「朝の調」・「雄悠」・「人魚」
・「母と子の群像」)

「モニュメント建設事業」は昭和57年から文化振興や景観整備のために始まった。

全体的に見ると、そのP.A.を見たこともないという回答が多く、認知度の差が著しい。「朝の調」【図-6】だけ認知度が高いが、これには、そのP.A.が市民文化ホールの敷地内にある文化公園の中心にあり、それ自体も大きく目立つことが影響していると考えられる。その他のP.A.は、設置場所の周りに植樹が多かった。そのために見つけにくくなり、認知度も低くなるのであろう。

◆ [G3] (「こだま」・「帽子の像」・「カルテット」・「春のよろこび」)
「彫刻のあるまちづくり事業」は昭和62年に“花と緑と彫刻のある文化的かおりの高いまちづくり”を理念として始まった。この事業によって設置されたP.A.は全て認知度が低い。

全体的に見ると、そのP.A.を見たこともないという回答が多い。また、個々のP.A.の認知度を比べると、

その差が著しい。

[G 3] のP.A. は全て鹿児島市の中心を流れる甲突川沿いに設置されている。「母と子の群像」【図-7】だけ認知度が高いのは、そのP.A. の設置場所が市電の走る交通量の多い橋の中央の欄干であることが関係していると考えられる。「こだま」・「カルテット」の認知度が若干高いことには、設置場所がそれぞれ橋の上・大通り近くの緑地であることが関係していると考えられる。「帽子の像」・「春のよろこび」の認知度が著しく低いことには、設置場所の周りに樹木が多く茂り、ある程度近づかなければ確認できないこと、緑地内の歩道の人通りが少ないことが影響していると考えられる。

◆ [G 4] (「ししおどし」・「天空をめぐる星」・「馬と子ども」

・「星空と彫刻と滝のオアシス」)

「まちかど整備事業」・「タウンアメニティ事業」はそれぞれ平成2年・平成4年に始った。この頃から噴水や街具型のP.A. が用いられている。[G 4] では、水を使った街具型のP.A. が多い。

全体的に見ると、P.A. を見たことがあると回答した人が半数近くいる。また、[G 4] のP.A. は他のP.A. と混同して認識されている割合が高い。

「ししおどし」【図-8】と「天空をめぐる星」【図-9】は繁華街のアーケードに設置されているから認知度が高くなるだろうと予想していたが、それほど高くなかった。設置場所が人通りの多いアーケードであるにも関わらず「ししおどし」の認知度が低いのは、そのまわりに数台の自転車が置かれていることが多く、それが障害物となり見つけにくくなっていると考えられる。また、混同して認識している人の割合が多かったことには、P.A. の土台や形態・大きさの似通ったものが他にあること、アーケードの中という似た環境で、しかもお互いに比較的近いところに設置されていること等が影響していると考えられる。「星空と彫刻と滝のオアシス」【図-10】の認知度が高いのは、そこが待合場所としてよく使われることが関係していると考えられる。「馬と子ども」【図-11】に関しては鹿児島市北部の郊外の住宅地に設置されていることが、認知度の低さに影響していると考えられる。

◆ [G 5] (「雄悠」・「ま四角三つ」・「コーリング2」)

平均すると被験者のうち3割の人が認知しており、5割の人が見たことがあると回答している。

「ロマンチックオブジェ事業」の「悠雄」【図-12】と



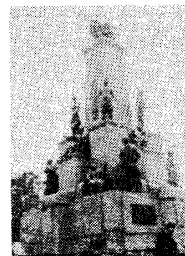
【図-2】コーリング2



【図-3】西郷隆盛像



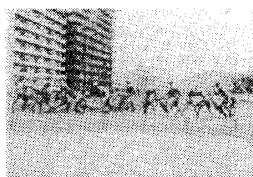
【図-4】刑務所跡門



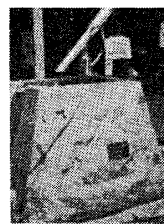
【図-5】若き薩摩の群像



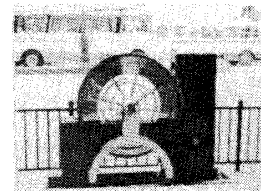
【図-6】朝の調



【図-7】母と子の群像



【図-8】ししおどし



【図-9】天空をめぐる星



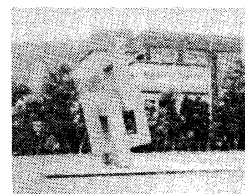
【図-10】星空と彫刻と滝のオアシス



【図-11】馬と子ども



【図-12】悠雄



【図-13】ま四角三つ

「ま四角三つ」【図-13】は共に公園の中にランドマークの形で設置されており、それら自体も大きく目立つ。「悠雄」は近くの大通りから容易に見ることができる。これらが、それぞれの認知度が5割以上・3割以上とそこそこの値を示していることに影響していると考えられる。

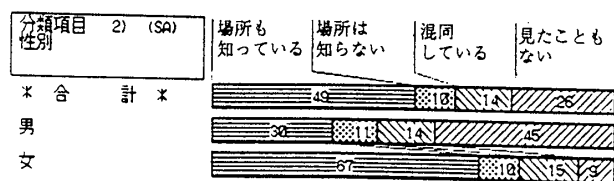
21個のP.A.全部を見ると、設置年度の古いものほど人々に良く知られている傾向がある。

またグラフからも分るように、同じ事業で設置されたP.A.の間にも、その認知度の値に大きな差があるという特徴が、どのグループにも共通してみられる。このことは、設置年度や設置事業よりも他の要素（例えば設置場所・周辺環境・P.A.自体の規模など）のほうが、認知度に深く関係していることを示している。

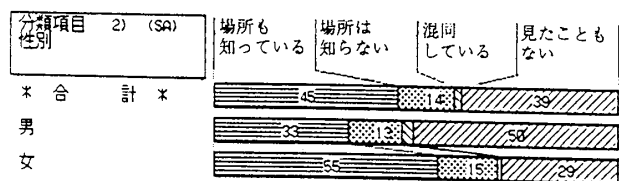
5. 被験者の属性と認知度

性別・年齢・鹿児島県での居住年数・居住地域・職業・仕事内容の6つの属性を軸として被験者を6つのパターンで分類し、それぞれの属性と認知度との関係を探った。顕著に現れた特徴だけを以下に挙げる。

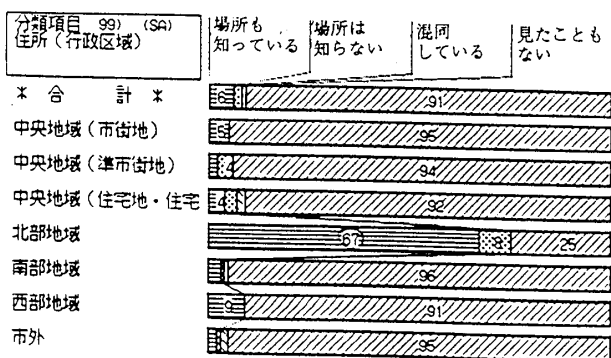
【性別と認知度】を全体的に見ると、性別によって認



【図-14】性別と認知度・「星空と彫刻と滝のオアシス」



【図-15】性別と認知度・「朝の調」



【図-16】居住地域と認知度・「馬と子ども」

知度に大きな差が現れているとはいえないが、「星空と彫刻と滝のオアシス」と「朝の調」において、女性の認知度の値が男性のそれの2倍程もあるという興味深い結果が得られた。【図-14】【図-15】

【居住年数と認知度】では、予測どおり居住年数の長い人の方が認知度が高いという傾向が現れた。

【居住地域と認知度】では、被験者をその住所を基に、鹿児島市内6地区と市外地区の7グループに分類した。市街地にあるP.A.に関しては、居住地域と認知度との関係は伺えなかった。北部地区の住宅地に設置されている「馬と子ども」に関しては、北部地区在住の人々の認知度が7割程ものに対し、他の地区に住む人々はほとんどが見たこともないと回答している。【図-16】

6. まとめ・考察

今回の分析の結果から、設置年度の古さ・設置期間の長さが認知度に影響していることが伺えた。

また、次のような要因がP.A.の認知度に密接に関連していることが伺えた。1. 設置場所が、大通りに近いなど人の行き来が多い所であるか。2. P.A.の周りに障害物等がなく周りから見やすいところにあるか。3. P.A.そのものの大きさと、形態の特徴。4. 像の場合、その題材が何であるか。の4つである。

以上のように、今回は設置場所・周辺環境と認知度との関係の深さが伺えたので、さらに細かい分析が必要であろう。また、P.A.の規模・大きさを軸とした分析も有効であろう。

P.A.は、まず人に見られ、知られることが大切である。人に知られることのないP.A.は市民から遊離してしまうだろう。今回の分析により、P.A.の存在を人々に知らせるためには、そのもののアピール性と設置場所の環境が重要であることが分った。しかしながら、まちづくり・景観づくりという視点からP.A.を見たとき、P.A.に必要なのは、目立つことではなく、景観との調和・社会との調和であろう。

今後は、今回のアンケートでおおまかな把握を行った【P.A.に対する人々の印象・評価】に関して、P.A.と周辺環境・景観とを一体として捉えた視点から研究を深めていきたい。

(注)

1), 2) 「パブリックアートが街を語る」 杉村 荘吉、1995年、東洋経済印刷